

『河童の婿入り』

著:加納 邑

ill:六芦かえで

男が歩きだし、またフラツとその足がもつれた。

杏は彼に駆け寄って、腕をつかむ。

「あのっ、大丈夫？ あの神社までなら、送っていくから。つかまって……っ」

「ああん？ あー……」

酔っ払っているらしい男は、了承したのかしないのか、よく分からない返事をした。

杏は彼を支えながら、川から二十メートルくらい高さのあるその橋を渡りきった。

橋の脇についている五十段ほどの階段か、アスファルトの坂道を下り鳥居を潜ると、川のすぐそばにある神社の境内に入る。酔っている男の足取りが心配なので、アスファルトの緩やかな坂道を回り込むほうを選び、社(やしろ)のそばにある社務所へ向かった。

男がポケットから鍵を取り出し、杏はそれで引き戸になった玄関を開ける。

入ってすぐは土間になっており、右手にステンレス製の大きな流し台のついた炊事場があった。その壁についているスイッチを入れると、天井の蛍光灯がついた。土間の奥には六畳ほどの板間があり、その先に十二畳ほどの和室が二間続いていた。部屋をぐるりと取り囲む板張りの廊下を通して、どの部屋へも土間から上がれるようになっている。

想像していたとおりの古さ。

しかし、最近買ったと思われる真新しいテレビやオーディオ機器のようなものが、一番奥の部屋にいくつか見えた。同じ部屋に布団が一組、敷きっ放しになっている。きつと男はそこで寝起きしているのだろう。

(中って、こんなふうになっていたんだ……?)

天井の照明をつけて、男を一番奥の和室へと連れていった。

肩から彼の腕を外すと、男は倒れ込むようにして布団の上に座る。

杏もその前で畳の上に座り、彼と向かい合った。

とりあえず落ち着いてホツとしたあとは、沈黙が気になってくる。雨上がりのせいか、真夜中の山の静けさが、社務所を包み込んでいた。

杏は初対面の相手との会話に少しドキドキしながら、名乗った。

「あの、僕、遠(とお)野(の)杏(あ)っていいです。あなたは……？」

「俺え……？」

男は酔いのせいか、つっけんどんな口調だ。

「俺は、水(みな)神(かみ)西(せい)流(りゅう)だ。西の流れ、っていう字だ」

「西流さん……」

男の切れ長の目が、少しトロンと潤んでいるように見える。

杏はふと、昨夜見たニュースを思い出した。県内の大学生が飲み会で急性アルコール中毒になり、病院に運ばれたというものだ。もしかしたら目の前の、西流と名乗った男もそうなるのではないかと不安になった。

「お水とか、いる？ 飲む？」

「んー……」

よく分からない返事をする彼の様子から、やはり水を飲ませたほうが良いと判断した。

「も、持ってくるね……っ」

いったん土間に下りて、流し台へ向かう。そこにあったグラスを一度洗ってから水を入れ、和室に座っている西流という男のところへ戻った。

「はい、水……あっ！」

グラスを渡そうとした杏は、畳の縁に足を取られ、前のめりに転んで膝をついた。

手からグラスは飛ばなかったが、水がバシッと西流の頭にかかった。

布団の手前で畳に膝をついた杏は、真っ青になる。

「ご、ごめんなさい……っ」

急いで西流の濡れた頭を拭こうとして、左右を見回してみたが、タオルらしきものは見当たらない。なにか拭くものはないか、西流に訊ねようと、顔を戻して彼を見た。

そして、杏は息を呑んだ。

ポタポタと水の滴る、西流の茶色の髪。

そのやわらかそうな髪が覆う頭上に、白い皿のようなものが現れていた。

(あ……っ?)

自分の髪のを引っぱり、そこから滴(したた)る水を払っている西流の指。その間には、信じられないことに、透き通った水掻きのようなものが見える。

杏は呆然とし、目の前に座る彼を見つめた。

「み、水掻き……？ 皿……？」

こんな人間を見たのは初めてだ。いや……この人は、人間なのだろうか……？

皿と水掻き以外は、普通の人間となんら変わらなく見えるが……。

「お前、見たな……？」

一瞬、酔いが醒めたのか、西流の鋭い目に室内灯の明かりが反射し、獣のようにキラッと光った。息を呑んで固まっている杏の前で、彼はヒクッと大きなしゃっくりをする。いや、やはりまだかなり酔っているらしく、目元がわずかに赤くなっていた。

「頭のとっぺんに水を被ると、俺たちはこうして元の姿に戻っちゃう。頭のとっぺんっというのは、俺たちにとって命と同じくらい大事な皿があるところだからな。敏感なんだよ」

西流は頭上に見えている皿に、そっと手を当てた。

すると白い皿がみるみる消え、代わりに、彼の手に一本のペンダントが握られていた。

黒い革紐のペンダント。中央に、親指の爪くらいの大きさの、白くて丸い貝のような飾りがついている。それに頭を通し、彼は首に下げた。

(……っ!?)

いつの間にか、先ほどまでと同じ、まるきり人間と変わらない外見になった西流。彼の手からは、指の間に見えていた透き通った水掻きも、きれいに消えていた。

「あ……」

信じられないことばかり見た杏は、目を瞠(みは)っているしかなかった。

西流はまだ酔っているかのような潤んだ瞳で、そんな杏を見て言う。

「頭の皿が割れたりなくなったりしたら、俺たちは『力』を使えなくなっちゃう。だから、

人間の姿になっているときは、こうして首に下げて、なくさないようにしておくんだ」
「……」

西流は『人間の姿になっているときは』なんて、まるで自分は人間ではないような言い方をする。杏はゴクリと唾(つば)を飲み込んだ。

(こ、この人って……いったい、なに……?)

杏の心の中での疑問に答えるかのように、布団の上に胡坐(あぐら)をかいている西流は、彼の前に座る杏を真っ直ぐに見つめ、きっぱりと言った。

「もう想像がついているだろうが、俺は河童(かっぱ)だ」

「……っ!!」

杏の『もしかしたら』という予想は外れておらず、杏は衝撃に包まれた。

「河童? 河童って、よ、妖怪の、河童……?」

「誰が妖怪だ」

少し身を引いた杏の前で、西流が口を引き結んだ。

「妖怪なんかじゃない、水の神だ」

彼は不満そうに言う。

「まあ、人じゃないっていう点では、妖怪も神も、人間にとってはいっしょかもしれないが。俺たち河童っていうのは、ずっと昔、水の神と、山奥の川辺に住む人間が交わって生まれたって言われている。そのときに、水の神から『力』も授かった」

「ち、力……?」

「俺たちは単に『力』って呼んでる。河童が持っているその力は、人間が神通力とか験(げん)力(りょく)とか呼んでる、そういうのと似ている」

「神通力……」

彼の口から語られる不思議な話に、ただ瞬きをしながら聞き入っていると、西流という名のその自称『河童』が、チッと口の中で軽く舌打ちをした。

「って、なにを説明させてるんだよ。そんなことはどうでもいい。とにかく……俺の正体を見られたからには、お前をタダで帰すわけにはいかない」

「え? あ、あの……」

ずいと身を乗り出してきた彼から、杏はとっさに逃げようとした。

タダで帰せない、というのは、もしかして殺されてしまったりするのだろうか。頬から血の気が引き、必死に首を横に振る。

「あなたが河童だっていうことは、誰にも言いません」

「当たり前だ」

杏の方へ布団に手をつけて身を乗り出したまま、西流は硬い口調で言う。

「他の奴に、今夜ここで俺に会ったことを一言でも喋(しゃべ)ってみろ。子々孫々まで、お前の血筋を呪(のの)ってやるからな」

どう聞いても『神様』というより『妖怪』と形容したほうがいのような、恐ろしげな脅(おど)し文句を吐き捨てるように口にして、西流はジーッと杏の顔を見つめた。

「ふーん……」

男前な顔がすぐそばまで来て、杏は焦る。

「な、なに……?」

「お前、けっこう可愛い顔しているじゃないか」

二の腕をつかまれて、ドキリとした。

「肉付きがいまいちだけど、まあ、たまにはこんなのもアリかな」

杏の二の腕をぐにぐにと揉むように触っていたその西流という男が、背中を後ろへ反らしながら杏の腕をぐいと引っ張った。

あっ、と声を上げたときには、杏は勢いよく布団の上に手をついていた。

息を呑んでそのまま固まった杏の上に、西流が伸しかかってくる。身体を横に転がされ、仰向けに布団に倒された杏は、和室の天井を背にした彼に見下ろされた。

「抱かせろよ」

「……？」

「今夜は街で飲んでたんだが、いっしょに飲んでた女が酔い潰れて、やれなかった。仕方なく独りで飲んでたら、ついつい深酒しちゃった。つまらないし、別の女を見つける時間はなかったしで、くさくさしながら帰ってきたんだ」

今夜は人間とやるつもりで街へ行ったのに、と西流は言って、少し鋭いその目に甘い欲情を滲ませて杏を見つめてくる。

「だから、お前が代わりにやらせろ」

本文 p20～27 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>